

地域の子どもたちの健やかな成長を願って

# けんもり 特別支援教育だより

岡山県健康の森学園  
支援学校  
編集:教育支援係

第3号

平成28年 1月15日

## 教師の専門性について

平成19年の学校教育法の一部改正等により、特殊教育が特別支援教育となり、特別支援学校や特別支援学級等で学んでいる児童生徒だけでなく、通常の学級に在籍する発達障害のある児童生徒に対しても、一人一人に応じた教育的ニーズを把握し、正しい理解と適切な支援を進めることとなりました。また、2014年1月に我が国は国連の「障害者権利条約」を批准し、インクルーシブ教育体制構築に向けた取組が着々と進められています。



副校長 長濱益次

このような動きの中で、特別支援教育を担う教員には特別支援学校教諭免許状の保有率向上や研修による専門性の確保、特別支援教育全般に関する基礎的知識、障害種ごとの知識・理解及び実践的指導力等の専門性の向上が強く求められています。

ここで特別支援教育を担う教師の専門性の一つである確かな授業力について考察してみます。

- 子供の特徴と支援ニーズを理解しようとする力（実態把握）  
受容的な対応に心掛け、子供の発言や行動の意味を事象と事象との関係から読み取ること。障害に子供を当てはめない見方が大切。
- 適切な目標を設定する力（長期目標と短期目標の設定）  
子供の発達と生活経験、障害特性を踏まえて、実態把握したことに基づき授業目標を設定すること。この際、子供の将来の姿（長期目標）を描くことで、毎時間、焦点化された授業がなされ、より効果的に子供の力に結び付いていく。
- 教材化する力と分かる授業実践力（指導実践）  
この教材で何が教えられるか、何を支援できるか等、目標と関連付けた教材の選定や構成。教育環境の整備。子供が考え、分かり、自らの行動を促す教師の動作・表情・指示の工夫、共感的対応。興味・関心に応じ体験化・具体化された授業展開。
- 評価し記録する力（評価・修正）  
一人一人の子供が授業で「分かった」「できた」という達成感を感じ、自己肯定感（自尊感情）を高めることができたか。指導を振り返ることのできる記録を書くこと。

「障害」というフィルターを通すあまり、子供にできることをさせなかったり、教師の意図した行動に沿わせようと不要な指示が多かったり、怒ったり…など本来の教師の専門性をおろそかにしていないでしょうか。特別支援教育における教師の専門性を語る前提として、「子供」や「教育」についての専門性を改めて考えてみたいものです。

最後に小児科医である新井清三郎氏の言葉を引用します。

「発達とは何かと言うと議論は百出するが、一人ひとり異なった障害や、個人差の大きい子供の姿に対応していく上では、なかなか理論が当てはまるものでもない。最も重要なことを挙げるとするならば、『待つこと』である。障害児教育は『待つこと』から始まり『待つこと』で終わる。『待つこと』は怠ることではない。子どもに対する手立てを工夫し、研究し、働きかけることが、その背景にあってこそ『待つこと』の意味が出てくる。待つことは、すなわち『見ること』である。待っていると見えてくるのである。待つことには三つの意味を含む。『立ち止まる』『見渡す』『自分の足元を見る』である。足元とは、子供を教えるだけでなく、自分も成長するものだとして改めて考えてみることである。」

(引用：新井清三郎、「障害を考えるー発達の原点からー」、学芸図書、1995年)

## “支援よりも理解を！”

この言葉は、現在、川崎医療福祉大学特任教授、ノースカロライナ大学非常勤教授で岡山（日本）に自閉症療育の考え方を広めてくださった佐々木正美先生の講演の中で何度も話されていたことです。まだ30歳代だった私は、「支援が大事なはずだけど・・・。」と混乱したことを思い出します。その後、発達障害の子供たちと出会ううちに、無理解である人が支援した結果の「強度行動障害」について知り、佐々木先生の言葉を再認識するようになりました。

家庭でも、学校でも、地域でも、相対する人（子供）について、正しく理解しようとするのが、支援のための、はじめの一歩と考えています。支援よりも理解の方が先にあるのです。「こちらの都合で闇雲に行く支援ならばしない方がまし！」は言い過ぎかもしれませんが、当事者の子供からの声「手出し口出しよりも、危険がないように、静かにして見守っていてほしい。」が聞こえてきそうです。

しかし、相手（子供）を正しく理解するということが大変に難しいことです。自分のことさえわからなくなることもあるのに、別の人間を正しく理解するなんて不可能とさえ思えます。だから、私の場合は、正しく理解しようとするというかわり方の心構えが必要で、直接的な支援の実行を急ぎすぎないと思うようにしています。「理解の難しさ＝支援の難しさ」ととらえ、様々な視点で幅広く理解していくことが、結果的に、息の長い、将来に役立つような、適切な教育支援につながっていくと考えるようになりました。

生活は日々続いています。「理解してから、様子を見てから。」などと悠長なことでは間に合わないこともあります。そんな時のために、佐々木先生がたくさんのアイデアを示してくださっている本をご紹介します。ぜひ、ご一読ください。

(黒瀬智子)



『発達障害の子に「ちゃんと伝わる」言葉がけ』  
佐々木正美著 すばる舎 2015年